

細胞診標本での再水和法の有用性

○細井 京子,津久井 綾子,尾身 麻理恵,富沢 一与,萩原 勉,金子 心学
(前橋赤十字病院),土田 秀(群馬県立がんセンター)

【はじめに】細胞診標本は、穿刺吸引細胞診や婦人科内膜細胞診など、採取時の血液混入を未然に防ぐことが難しい場合がある。また、気管支ブラシや胆管ブラシ細胞診では、標本作成時の乾燥により、十分な観察が困難な場合がある。今回我々は、血液混入の多い検体や、乾燥しやすい検体について再水和法が有用であるか検討を行った。

【対象と方法】穿刺吸引細胞診検体を吹き出し後、合わせ法で標本作成し、一枚を 95%エタノールにて湿固定、残りを乾燥した後、再水和処理を行った。内膜標本は、細胞採取時に直接塗抹標本を二枚作成し、一枚湿固定、残りを乾燥後、再水和処理を行った。気管支ブラシ、胆管ブラシ標本については、直接塗抹標本を複数枚作成し半分湿固定、残りを乾燥後、再水和処理を行った。再水和処理の方法は、群馬県立がんセンター法を用い、生理食塩水を 30 秒間上乘せ後、生食を振り払い湿固定した。その後、通常湿固定標本と同様にパニコロウ染色し、背景所見や、集塊での構築、核所見について比較検討した。

【結果】再水和処理により背景赤血球が溶血し、赤血球が細

胞集塊上に被ってしまうことによる細胞の不明瞭化が無くなった。甲状腺や内膜で、それぞれ大型集塊の観察が容易になり、濾胞構造や内膜腺管構造、間質細胞が確認できた。乳腺標本は、集塊の二相性が観察でき判定が容易となった。また、気管支ブラシや胆管ブラシ標本は、再水和処理を行ったことで乾燥による不適正が減り、評価可能となった検体もあった。細胞所見は、再水和処理標本で軽度核腫大傾向や核クロマチンの変性を示す細胞も認められたが、判定可能なものが多かった。

【まとめ】今回実施した血液混入を認める検体や、乾燥しやすい検体に再水和法は有用であった。再水和法は簡便かつ安価であり日常診断に有用な方法であると考えるが、甲状腺乳頭癌のように核所見が非常に重要な場合があるため、通常処理標本と併せて実施することで、より一層役立つと考える。

連絡先 027-224-4585 内線 (3212)